

平成 5 年 6 月 22 日	植 防 情 報	発 表	栃 木 県 病 害 虫 防 除 所
------------------------	---------	-----	-------------------

病害虫発生予察特殊報第 1 号

病害虫名 ミカンキイロアザミウマ

1. 発生確認までの経過

本種は、平成 2 年 6 月に埼玉県と千葉県で発生が確認された後、現在までに静岡県、岐阜県、群馬県、東京都で発生が確認されている。

本県では平成 5 年 6 月 17 日、大田原市親園地区のガーベラ（施設栽培）に花卉の退色や奇形花の発生がみられ、寄生していたアザミウマを県農業試験場及び当所で調査したところ、県内では未発生のミカンキイロアザミウマであることが確認された。

2. 発生状況

現在、面積約 20 a の施設内のガーベラ及びインパチェンス等花き類で発生が見られている。

3. ミカンキイロアザミウマの特徴と生態

(1) 形態

雌成虫の体長は 1.5 ~ 1.7 mm、体色は淡黄色 ~ 褐色で、近縁種のヒラズハナアザミウマによく似ている。雄成虫の体長は 1.0 ~ 1.2 mm、体色は淡黄色で、形態は雌成虫に似る。

本種は、前胸背板に 5 対の長刺毛をもつことと、前翅前脈の刺毛列が途切れることなく一様であることにより他のグループから分けられる。さらに体色に

黄色系統があり、複眼後刺毛の内側から4番目が目立って長く、後胸背盾板の後方に鐘状感覚器があることで同属のヒラズハナアザミウマ及びカホンカアザミウマと見分けることができる。

(2) 寄主植物

ガーベラ、きく、カーネーション、シクラメン、インパチェンスなどの花き類、いちご、トマト、メロンなどの野菜類、みかん、もも、ぶどうなどの果樹類など多寄生性で、これまで200種以上の寄主植物が確認されている。

(3) 生態

卵は、葉や花弁などの組織内に1個ずつ産みつけられる。ふ化した幼虫は主に花弁や頂葉の間に生息し、摂食をはじめめる。2齢幼虫は蛹化場所の土中や落葉中へ移動し、前蛹となる。蛹期には摂食せず、自らは動かない。

1世代に要する期間は15で約40日、20で約20日、27で約14日である。成虫になると再び花弁、新芽、新葉に移り、加害する。なお、本種は、白色や青色に誘引される。雌成虫の寿命は30～45日で、羽化後3日目ごろから産卵を開始し、この間に150～300卵産下する。

4. 被害

成虫および幼虫の吸汁によって花き類では花弁の退色や褐変、奇形及び新葉の萎縮や奇形を生じる。

5. 防除対策

(1) 発生地域及び発生ほ場からの苗の持ち込みを避ける。

(2) 施設栽培では、成虫の侵入を防止するため施設の開口部に寒冷紗を張る。

(3) 雑草にも寄生するのでほ場内や周辺の雑草を防除する。

(4) 収穫後の被害植物は発生源となるので早急に処分する。

(5) 現在、本種に対する登録薬剤はシクラメンでのパダン水溶剤、エピセクト水和剤のみである。他に有効薬剤としてトクチオン乳剤やオルトラン水和剤などがあるが、作物や品種、使用時期により薬害を生じるおそれがあるので、使用にあたっては十分注意する。なお、薬剤抵抗性の発達を防ぐためローテーション散布を行う。

